夕焼け通信 1378号　2022.11.28
〒690-0823　島根県松江市西川津町4276-B402　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

専業ババ奮闘記（その２）124

木幡智恵美

冬（5）

一月十三日、島根県内の新型コロナウイルス感染者数が百人を超えて驚いていたのが、十七日以降、日々百人をはるかに上回るようになった。その後も百人以下の日もあるものの、かなりの感染者が出るようになる。いわゆる第六波で、一月九日から三月二十一日まで、まん延防止等重点措置が全国でとられるようになった。

そんな第六波に突入した一月二十三日、義母の一周忌の法要を我が家で行うことにした。朝から仏壇の掃除をし、仏間と義母の部屋の間にある襖をはずす。ご住職を入れて大人（高校生含む）十人、子ども四人が集まる。なるべく間隔を空けて座ってもらおうと、座布団を離して置く。茶菓子の準備などをして待っていると、ピンポンが鳴った。すぐに玄関に出、手にアルコールスプレーをしてから入ってもらう。義姉や姪たち、その子ども、娘一家が、皆マスク姿で仏間に入っていった。ご住職が来られ、お茶を出しているとまたピンポン。仕出し屋さんだ。荷物運びや支払いなどばたばたし、仏間に戻ると読経は始まっていた。寛大も実歩も静かに座っている。宗矢はお母ちゃんの膝に乗ったり、私のところへ来たり。時折声を出すが、まあ許せる範囲だ。お説法では義母のことより、その連れ合いがご住職の住まう地で尽力した話が主で、初めて聞く話だった。

法要の後、当初は会食をと考えていたが、コロナまん延防止等重点措置中なので、仕出しの折を持ち帰ってもらうことにした。一挙に静かになり、夫と息子と三人で昼食。息子はすぐに遊びに出て行き、私と夫は片付けの後、墓参りに行った。

数日後の夕食時、「今日、祖母ちゃんの誕生日だね。生きてたら百二歳か」と話すと、息子が、「わっしぇた（忘れた）」と義母の真似。それからしばらく、義母の話になった。「せれしぇんけん（急ぎはしないから）って言って、テーブルの上にあるもの、つまんで食べてたな」「いつからか、有難うが『めんたし』になったよね」などなど。法事の日、いつもは会食であれこれ偲ぶのに、それができなかったので、ようやく供養できた気がする。「一年、あっという間だったな」夫は言うが、私には相槌が打てない。義母が亡くなったあとずっと、生き死にというものが頭の中にくすぶり続け、前に進んでいる気がしないのだ。

がらがら橋日記

宮森健次

グラウンドゴルフ　1

四十名ほどのグラウンドゴルフ大会に参加した。件のスポーツは、ずっと前に二三度やったことがあるくらいで、感触も細かなルールなどもすっかり忘れてしまっている。どうしたって凡庸な記録がせいぜいという自己理解だけは記憶しているので、ワクワク感などは皆無だ。ならばなぜ出ることにしたかといえば、誘われたからである。

誘いには乗ってみろ、という退職先輩の助言に従い、たいしてやりたくもないが、思いも寄らぬ出会いに恵まれることだってないとは限らないと考え「参加します」と言ったものだった。

誘った人には目的があって、あわよくばぼくを運営側に取り込んで今後なにがしか担わせたいらしい。それは察していたし、納得がいったならそうなってもよいとは思っていたが、とりあえずしれっと知らないふりを通すことにした。

平日の午前中にグラウンドゴルフに出られる者など高齢者に決まっているが、集まった面々はただの高齢者ではなかった。マイスティックにマイボールはもちろんのこと、シューズにはボールをカチッと収納できる金属トレーがセットされているし、帽子はゴルフマーカーをバッジふうに貼り付けられる構造になっている。砂だらけのボールを所在なげに手に持ってとぼとぼと移動するド素人とは一線も二線も画すアスリートたちだ。日頃競い合っている者同士の強固なつながりも感じられた。

少し臆して、面々が陣取ったベンチからわずかに離れて座っていると、ベンチ最前列の真ん中から、ぼくの名前を二度三度と読むだみ声が聞こえてきた。

「だーだこーは（だれだ、こいつは）。知らんぞ。」見ると、賞状をもらったみたいなかっこうで名簿を手にした恰幅のよいご老体だった。黙っていたらさらに大声で読みそうなので、

「ああ、それ私です、よろしくお願いします。」

と老人の前に出て会釈した。不審人物みたいに読み上げられるのは勘弁という思いを込めたつもりが、

「宮森てえと、○○に出ちょった○○は…」

「ああ、それ父です。」

「そげか（そうか）。知っちょうぞ。○○学校出て、一つ下に○○がおっただろ、近所の○○とは、よう飲んだ。去年死んだがな。」

さらに周囲を圧する声で、父や実家のご近所の話を始めた。ぼくの知らない父を知っている老人が突如現れたのだが、亡父が晒し者になっているようで気が気でない。開始の合図に救われたが、いまだに家族を覆っている傷つきやすい薄皮がひょいと見えた気がした。

30代フリーター　やあ、ジイさん。柄谷行人が自らの交換様式論を再考した新著『力と交換様式』を出し、新聞でも紹介されていた（10月20日朝日新聞デジタル）。

年金生活者　柄谷はこれまで歴史に登場した交換様式をA（互酬）、B（再分配）、C（商品交換）に分け、それぞれの時代に支配的な交換様式がA、B、Cの順に変遷してきたと指摘した。そしてCが支配する資本主義社会を「資本＝ネーション＝国家」が分かちがたく結びついた「ネーションステート」、すなわち民主主義国家ととらえた。だとすると、彼の交換様式論は非民主主義国の中国で資本主義が目覚ましい発展を遂げた現実を説明できないことになる。

30代　柄谷にそんな抜かりがあるとは思えないが。

年金　彼の資本主義社会のモデルは、すでに過ぎ去った産業資本主義の時代をもとにしているように見える。工場労働から利潤を得る産業資本主義は、取り替え可能な等質な労働力、市場で自由に等価交換できる労働力を必要とする。政治的な言葉に翻訳すれば、自由で平等な労働者を必要としている。その供給を絶やさないようにする仕組みとして自由と平等を旨とする民主主義国家を資本は必要とした。

ポスト産業資本主義の段階ではそれが一変する。資本は依然として自由で平等な労働力を必要としながら、他方で不自由で不平等な労働力を求めるようになった。それが最も利潤を生むからだ。「不自由で不平等な労働力」とは、市場でいつでも自由に売買できるとは限らない、稀有な労働力を指している。

「稀有な」というのはイノベーションを引き起こすことができるという意味だ。イノベーションこそポスト産業資本主義の利潤の源泉だからだ。そんな労働力を再生産するには、自由と平等を掲げる民主主義はときとして邪魔にさえなる。中国が政治的には不自由で不平等な「帝国」でありながら、経済は世界第2位のGDPに到達した理由のひとつがそこにある。

30代　柄谷はなぜひと時代前の資本主義をもとにモデルをつくったんだ。

年金　マルクス主義は経済と政治を分けた。そして経済を社会の土台ととらえ、その上に土台に応じた国家や文化が上部構造として形成されると考えた。土台が変われば上部構造はそれを反映して変化する、と。

だが、現実には土台と上部構造のねじれがあちこちに見られる。それは政治と経済を別次元にあるものとして扱うことを迫った。吉本隆明の『共同幻想論』はその思想的な達成だった。

柄谷はそれと逆方向の道を進んだ。政治と経済を分けるのではなく、一体のシステムとして扱った。それが彼の交換様式論であり、そこから導き出されたのが、資本主義と民主主義を一体のものと考えるとらえ方だ。

30代　吉本は柄谷をソフト・スターリニズムのシンパと批判していた。

年金　その言葉には柄谷の考えを「経済決定論」、すなわち土台が上部構造を直接決めるというイデオロギーとみなす意味合いが込められている。柄谷はそこで開き直ったのではないか。土台が上部構造を決めるどころか、両者は一体だということを証明してやろうじゃないか、と。それは『共同幻想論』への挑戦を意味したはずだ。

資本主義の高度化が加速する富の稀少性の縮減によって、上部構造としての国家が土台としての経済に従属する度合いが深まった結果、両者を一体のものとして扱う考え方に柄谷はいっそう引き寄せられていったのかもしれない。

30代　それは彼の交換様式論が今の時代を映し出すリアリティーを備えていることを意味しているのではないか。

年金　柄谷は「ネーション」の意味を拡張して使っている。それに従えば彼の資本主義モデルが中国に当てはまらないとは必ずしも言えなくなる。

柄谷のいう「ネーション」は現実に存在する「国民」を指していない。それは「想像的な共同体」であり、そこでは「自由」と「平等」が「想像」されていると同時に、現在では支配的でなくなった交換様式A（互酬）が「想像」されている。つまり、「自由」な競争によって「平等」を阻害するCと、「平等」な「再分配」を目指して

ニュース日記　856

中村　礼治

柄谷行人の交換様式論

「自由」を阻害するBのそれぞれの欠陥を補うものとして、「自由」な「贈与」と、「平等」な（相手と対等な）「返礼」が「想像」されていると理解することができる。

「自由」も「平等」も「想像」である限り、それらは中国にも存在する。中華人民共和国憲法には「自由」も「平等」もふんだんにうたわれている。ただし、西側諸国にくらべると、それらが現実と乖離している度合いがはるかに大きく、アメリカが中国を権威主義国家と批判する根拠になっている。

それでも柄谷の説には依然として限界を感じないわけにはいかない。彼の「資本＝ネーション＝国家」という資本主義社会のモデルは、「ネーションステート」、すなわち「民主主義国家」でこそより純化され、したがってより効率的に作動して資本主義を発展させそうなのに、むしろモデルからの逸脱が目立つ中国で資本主義が活性化したのはなぜか。柄谷の交換様式論からはそれを理解することができない。